

# 浮世草子と朝鮮王朝野談の女性像

高 永爛

はじめに

自己主張とは縁が薄く、儒教の絶対的倫理・道徳に従い生きていたとされている近世日本と朝鮮王朝の女性達は両国の散文に多様な側面から描かれている。殊に支配層ではない一般庶民層の女性像は日本では浮世草子、朝鮮王朝では野談<sup>②</sup>と呼ばれる一群の雑話集から確認できる。したがって、浮世草子と朝鮮王朝野談の女性像を通して、虚構の中の特異な女性像を確認したい。その小さな試みとして、第一に恋に生きる女性像を描いた井原西鶴の『好色五人女』(貞享三年)、笑いの対象となる「氣質」を有する女性像を描いた江島其積の『世間娘氣質』(享保二年)、己の願望に忠実な女性像を描いた上田秋成の『諸道聴耳世間猿』(明和三年)、

『世間妾形氣』(明和四年)の女性像を分析し、浮世草子において描かれる、一般常識からは到底想像できない虚構の女性像を追いかけて見る。第二に、朝鮮王朝野談の女性像が果たして浮世草子の女性像とどのような点で類似し、または相違し、その意味するところは何かということを究明するために、十九世紀に完成された『青邱野談』<sup>③</sup>の女性像を具体的に分析したい。

右の検討に入る前に、近世日本と朝鮮王朝の女性達を觀念上で支配していた儒教の理想的女性像とは如何なるものかを確認する。その理想的女性像と作品中の女性像の差異、または類似点こそが、浮世草子と朝鮮王朝野談に登場する女性達の意味を示唆すると思われるからである。

## 一・近世日本と朝鮮王朝の女訓書

儒教の影響の下、近世日本と朝鮮王朝両国の女性認識はほぼ同一であったと考えても差し支えないだろう。結婚前には両親に従い、結婚後には外で活躍する男性に代わり家を守って、夫をはじめとする夫の家に絶対的に従うことが女性の当然の勤めであり生き方であったとされる。この点は、『和俗童子訓』（宝永七年・貝原益軒撰作）の五卷「教女子法」<sup>4</sup>にも明らかである。全十八項目の「教女子法」には、女子教育の必要性が第一、第二、第十八項目に再三説かれている。<sup>5</sup>殊に第二項目では「女子をそだつるも、はじめは大よう男子とことなる事なし。女子は他家にゆきて他人につかうるものなれば、ことさら不徳にては、舅夫の心にかないがたし。」と、一見、当時の教育において男女の差別がないかのようにも見受けられる。しかし、第十八項目では第二項目とは異なる女性認識が垣間見られるのでここで確認したい。

故に女子は、男子にくらぶるに、智すくなくして、目の前なるしかるべき理をもしらず、人のそしるべき事をわきまえず、わが身・わが夫・わが子のわざわいとなるべき事をしらず、<sup>6</sup>

このように「教女子法」からは女性には男性に比べ愚かであると考えられていたことが理解できる。一方、朝鮮王朝にも女訓書が多々あり、殊に訓民正音創造以降はハンゲルで翻訳される作業が頻繁に行われ、その代表的な作品としては宋時烈（一六〇七〜一六八九）の『戒女書』（十七世紀半推定）がある。これは当代切つての鴻儒であった宋時烈が、嫁ぐ長女のために執筆したもので、後に紹介する十八世紀の女訓書よりは幾分具体性に欠け観念的であるとも言えるが、娘を持つ親に共通する、嫁ぐわが子を心配する心情に基づいたことばが見えることから世に広まったとされている。『戒女書』では、嫁ぐ娘のためであるからであろうか、「教女子法」のように女性が男性に比し愚かであるとの認識は確認できなかった。ただし、その具体的内容は、「教女子法」の第十六項目（嫁する娘に、親が説ききかすべき十三条）と類似しているので、類似箇所を絞って以下で比べつつ確認したい。

『戒女書』	「教女子法」第十六項目中 『戒女書』と同様の内容
<ul style="list-style-type: none"> <li>一. 父母への孝行・三. 舅姑への孝行</li> <li>二. 夫に尽くす道理</li> <li>四. 兄弟和睦の道理</li> <li>五. 親戚和睦の道理</li> <li>九. 嫉妬を禁じる道理</li> <li>十. 言葉を慎む道理</li> <li>十一. 財物を節約する道理</li> <li>十二. 仕事を勉る道理</li> <li>十八. 巫・覡などのわざに迷わざること</li> <li>十五. 奴婢を扱う道理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一. 両親と舅姑への孝行</li> <li>二. 婦人は別に主君なし</li> <li>三. 夫の兄弟と和睦の道理</li> <li>四. 嫉妬を禁じる道理・五. 夫の不義時の注意</li> <li>六. 言葉を慎む道理</li> <li>七. 勤勉、儉約、淫楽禁止</li> <li>九. 儉約</li> <li>八. 巫・覡などのわざに迷わざること</li> <li>十三. 下女をつかう時、注意すべき点</li> </ul>

右のように「教女子法」の第十六項目と『戒女書』の内容は多く重なっている。したがって、嫁ぐ女性に期待されるものは近世日本と朝鮮王朝とで大差なかったと考えても良いだろう。ただし、「教女子法」の第十四項目、第十六項目の第十条に繰り返される「男女の隔たり」は『戒女

書』には表立って言及されておらず、李徳懋（二七四一）一七九三<sup>(7)</sup>の執筆した『士小節』（一七七五）<sup>(8)</sup>で婦人ではなく士への教訓として登場する。これを以下で確認してみる。

一. 親戚の家へ行つて婦女を見ても軽率に話しかけたり笑つたりしてはいけない。

一. 色に陥ることの浪費を考えよ。（浪費は）己の行いを無駄にし、己の体を無駄にし、己の財を無駄にする。したがって禁じるが良い。

一. 妻の姉妹に会う人がいる。これは親戚の厚誼のためであるが、頻繁に会うのは善くない。万が一、互いに意志疎通する必要があるとも手紙をやり取りしてはいけない。

右のものは「教女子法」の第十六項目の第十条「わかき時は夫の兄弟・親戚・朋友、或は下部などのわかき男来たらんに、なづさいちかづきて、まつわれ、打ちとけ、物がたりすべからず。つつしみて、男女のへだてをかたくすべし。」とあるのを男性のための教化に置き換えた趣がある。男女の差はあるものの、朝鮮王朝でも浮気心を警戒していたことがわかる。

さて、先に「教女子法」では男性に比し女性は「愚か」であると蔑まれていた点を確認したが、『戒女書』は宋時烈

の娘一人に対するものなので、一般女性への認識は明確に現れてはいなかった。では、『士小節』に見受けられる女性認識、それに伴う男性認識は果たしてどんなものであったのか確認してみよう。

一 私はこのような事を多々見たが、それはあくまでも家長が懦弱で治めきれず婦人の標毒を育てたためである。このため諺に「子供は幼いとき教え、婦人は嫁いで来た時教えるべきである」とあるのである。

一 婦人が傲慢放恣になるのは、皆男が自ら身を正しくしていないからである。

一 世の愚かな男のうちに気の強い婦人に制圧され身動きの取れない者がいるが、これは人倫の大きな変であり、王法の許さないところである。

一 生活が苦しければ、文士の妻が生業を少しばかり営むのは可能なことである。

一 凡そ女性には才に長け性品が賢く聡明な者も多いので、直ちに理解し、よく感動する。愚かな男に比べ、賢い女性に念を入れて教えたらどうしてよい結果を得られないことがあるか。(女性には) 難しい事は言わずその要点だけで分かるようにすべきである。

右のように『士小節』では、気が強く傲慢だったり、才

気に長けていたり、金銭感覚に富んでいたり、時には男を蔑んだり、男性の代わりを生業を受け持ったりする女性の存在を暗示している。さらに場合によっては婦女の悪行は、愚かで無能な男性のせいである旨を明確にしている。このような女性の能力・可能性への認識や、その一方で男性の愚昧と過失に対する認識は、果たして朝鮮王朝野談に反映されているのだろうか。また、男性より愚かであるという女性への蔑視が浮世草子に反映されているのだろうか。

近世日本と朝鮮王朝の女訓書から両国の女性への認識、および男女関係についての認識はほとんど変わらないと言つて良いだろう。ただし、近世日本では女性への相対的蔑視が明確にされていたのに対し、朝鮮王朝では女性の能力・可能性が認識されていたことは注目に値する。それを踏まえて虚構の中の具体的女性像を見て行きたい。

## 二 近世日本の虚構の中の女性像

### 二の一 女訓書からはみ出た『五人女』の女性像

『五人女』の女性達はそれぞれ恋に生きる女性として描かれ、その意味することについては多くの先行研究がある。しかし、女性達に対する作中(語り手)の評価、殊にその最期のあり方に対する評価からうかがわれる、語り手の女性

達への視線については、まだ十分な検討が行われていない。ここでは女性達への評価が大きく二つに分類出来る事に注目したい。まず、その最期を美しく、または同情的に描かれた女性達の姿を確認してみる。これに当たる人物は一卷のお夏、三巻のおさん、五巻のおまんである。一例に、清十郎と結ばれた後のお夏の姿を以下で確認してみる。

いつとなくおなつ、清十郎に思ひつき、それより明暮、心をつくし、魂身のうちをはなれ、清十郎が懐に入りて、我は現が物いふごとく、(中略) 我を覚えずして、恥は目よりあらはれ、

このように、清十郎に一途であつたお夏は清十郎の死を知り、狂乱するに至る。

お夏も同じ嘆きにして、七日のうちは断食にて、願状を書きて、室の明神へ命乞ひしてたまつりにけり。(中略) おなつそだてし姥に尋ねければ、返事しかねて泪をこぼす。さてはと、狂乱になつて、「生けておもひをさしやうよりも」と、子供の中にまじはり、音頭をとつてうたひける。

一時期狂乱したものの、平常心を取り戻したお夏は結局、「大経のつとめおこたらず、有難きびくにとはなりぬ。これを見る人、殊勝さまして、『伝へきく中将姫のさいらいなる

べし』と、」と美化される。<sup>10)</sup> お夏は自害を思いとどまり出家し、賞賛の対象として設定されているのである。これはお夏が「教女子法」に再三述べられている男性に対する従順を、出家を以つて守り通したから可能であつたのだろう。

一方、『五人女』に登場するもう一つの類型の女性は、一卷の皆川、二巻のおせん、四巻のお七である。一例として、その最期が決して美しく同情的に描かれているとは言い難いおせんの場合を見てみよう。

その後、なきがらも、いたづら男も、同じ科野に恥をさらしぬ。その名さままのつくり歌に、遠国までもつたへける。あしき事はのがれず、あなおそろしの世や。その最期が、まるで因果の報いであるように描かれたおせんも、はじめは美しく評判のよい娘で、左の傍線部に示されているように、男を全く知らない模範的女性として描かれていた。

「この家におせんといふ女なうては」と、諸人に思ひつかれしは、その身かしこきゆゑぞかし。されども、情の道をわきまへず、一生枕ひとつにて、あたら夜を明かしぬ。かりそめにたはぶれ、袖つま引くにも、遠慮なく声高にして、その男無首尾をかなしみ、後はこの女に物いふ人もなかりき。これをそしれど、人たる人

の少女はかくありたき物なり。

このようなおせんが樽屋と情を交わした後、その心情は恋のために劇的に変わり、果ては以下のように描かれるのである。

樽屋がかりの情をわすれかね、心もさらに、うかうかとなりて、昼夜のわきまへもなく、おのづから身を捨て、女に定まつてのたしなみをもせず、そのさまいやしげになりて、次第次第やつれける。

前で確認したお夏と同様、おせんは未婚であり、彼女が恋をするのは道を外れたことではない。にもかかわらず、西鶴は右の傍線部のように描いているのである。その最後を美化されたお夏も始めから男選びをする人物であり、決して恋に疎くなかったことを考え合わせると、描写の意図が恋することに対する否定ではないはずである。ここでおせんとお夏の差異は、前者が恋を前後に心情変化を見せたという点だけである。この心情変化に対する作中の否定的視線は、二巻から述べられているので確認してみる。

▼(久七は)柳小路にて、鮎屋をして世を暮し、せんが事、ついわすれける。人はみな移り気ぞかし。

▼されば、一切の女、移り気なる物にして、うまき色話に現をぬかし、

右のように、心情変化を否定する視線の延長線上に、男のために心情変化を見せる未婚のおせんが描かれたと考えられる。更におせんが「思へば思へばにくき心中、とても濡れたる袂なれば、この上は、是非に及ばず、あの長左衛門殿に情をかけ、あんな女に鼻あかせん」と「教女子法」で否定される「妬み」に身を燃やしたその結末は、前で確認したように因果応報の対象となっているのである。これはおせん同様、皆川、お七がはじめは穏やかであったが、後に恋の結末に際し、それぞれ自殺、放火という極端な方法をとって己の心情変化を見せたため、作中でその最期を美しく描かれなかった事とも通じると言えよう。

以上のように『五人女』の最期の評価は、女性の恋の純粹性や正当性よりも、最後まで男に対して献身的であったか、それとも恋に対する己の感情を抑制できず、自殺、妬み、放火という極端な方法で心情変化をみせたのかということに拠ると考えられる。もちろん、『五人女』の女性達は皆、反倫理・反道徳的な恋を通して自我を実現しようとした点では同様で、封建社会下で己の恋のために生きた女性像としてその意義がある事は否めない。ただし、女性それぞれの行動の結果が、愛する男のための犠牲的なものであるのか、それとも恋という己の自我が挫折することに対す

る鬱憤をはらしたものであるのかによって、彼女達の最期の評価は分かると考えられる。ここに男性より女性の存在意義を軽視する傾向は見られるものの、心情変化に対する相対的な評価が行われ始めていること、つまり最期を否定的に描かれた女性像が絶対悪ではないことが逆説的に描かれたと言えよう。

## 二の二・女訓書からはみ出た『娘気質』の女性像

『娘気質』に登場する女性達は各々の「気質」、つまり、女性一般からは見受け難い趣味、性格、能力等を有すると知られている。この「気質」とは、一般に女訓書の描く理想的な女性像からは遠い、負のイメージとして捉えられるのであるが、先行研究では「気質」を有する女性像の意義を考察の主要対象としてはいない。ここで『娘気質』の女性像が意味するものは如何なるものかを考えて行きたい。

まず、『娘気質』の最終話である六の二では、男性に従順な女性が描かれているが、これは浮世草子の常套的な結び方として、模範的な人物とその善き結末を設定したためだと考えられるので、考察の対象としない。六の二以外の『娘気質』の女性達は、男性に従順であるとは言い難い。殊に、一の一から二の二までの女性達はわがままで気が強く、対

して男性は気の弱く愚かな人物として描かれるので、これを確認してみたい。

▼ 聾が耳やかましよういふをきらふて、「乳母、あの人をあつちへやりや」といじり出すこそきのどくなれ。(一の二)

▼ 女の身にては我女の姿をきらひ、何の因果にて女と生れて、瘦たる男ひとりをまもり、自由なるあそびをせぬ事ぞと、(中略) いづれ夫の威なくして今時の奢女房の心まかせにまかれなば、(一の二)

▼ 「爰はわらはが一智恵出し働いて見るべし」と、おもての柱に女筆指南のはり紙して、(中略)「なんぞかはつた思ひつきで銭もふける思案して、我等をやしなふて給はれ。其かはりに食焼てすへそなへ、洗濯物も我等してあてがひ、寝道具のあげおろしも拙者いたして、そなたの手にはかけまひ。どうぞ此城のもてるやうにたのむ」(二の三)

▼ 「いかに男なればとて諸侍の娘を生れぞこなひと悪名を付らるる段、いかにしても女の一分すたつて、先祖の佳名迄よごす事口おしき次第也。」(中略)と鏝元くつるげ居合腰になつてつめかくれば、元来半四郎臆病者、(二の一)

▼大かたは女房家主奢て、無用の腰元中るをかかへ、(中略)内にてはいいしゆが借銀返弁の日限相違と催促つけられ、留守つかふて仏壇の間にとぢこもり、むねをいためてゐるもしらず。(二の二)

右の女性達は、前に確認した『土小節』の「気が強く傲慢だつたり、才気に長けていたり、金錢感覚に富んでいたり、時には男を蔑んだり、男性の代わりに生業を受け持ったりする女性」をそのままを写していると言つても過言ではないだろう。つまり、『娘氣質』の一の一から二の二までの女性達は、日本の女訓書で描かれる理想像のように男性に従順な人物ではなく、むしろ『土小節』で認める現実的な女性像として描かれていると言える。

次に、『娘氣質』には浮気な女性が多く描かれるのであるが、三の三、四の三、五の二、六の一がこれに当たるので、その一部を確認してみよう。

▼すこしも是を恥たる粧ひもなく、若い手代をとらへてじやらじやらとの転合口。両親の目にあまり又も浮名のたたぬうちにと、(三の三)

▼それからつき出しの白人となつて、其役者と一座する事をよろこび、「とをから此身であつたもの」と身をぞんざいにしたひ事して世をわたりぬ。(四の三)

▼主人の娘おとわどの、同じ家中の歴々へ縁につかれしが、出入の玉都といふ声のよい座頭と、度々のふ義あらはれ、(中略)女の智慧からおそろしき巧。(五の二)

右の女性達は一人の男に満足できずに浮気を重ね、その浮気を罪悪として感じることでできない人物として描かれるのであるが、これは明らかに女訓書で禁じている女性の姿である。ただし、彼女達の浮気心が意識的なものであるとは言い切れない。

最後に、『娘氣質』には天性とも言うべき「氣質」を備えている女性達が、二の三、三の一、三の二、四の一に登場する。順に、哀しい事に執着する女性、愷気深い女性、仏説に執着する女性、家業である鼓打ちに長けている女性であるが、その一部を確認してみよう。

▼天性(うまれもつ)て愷気ふかく、(中略)此娘まだろくに舌もまはらぬ形をして、「そちはたがゆるして尻ふつてありくぞ」(三の二)

▼(息子)生得ぶ拍にて間にあはず。(中略)(娘)天性拍子よく鼓をすきて、親の打ほどの事をならはずしてよくおほへ、(四の一)

右の女性達の「氣質」は、女訓書で述べられる女性の備えるべき女徳、女巧とはかけ離れているので決して好まし



いとは言い難いが、三の一の「愷氣」を除いては、その「氣質」自体が罪悪なのではなく、むしろ個人的な「願望」の現れであると言える。にもかかわらず、哀しい事に執着する女性、愷氣深い女性は夫により正されるものの、仏説に執着する女性、家業である鼓打ちに長けている女性はそれぞれ「裏寺の墓守の女房となつて、昔の形かはり浅黄の古裕」、「ゑぐ瘡とやらんにて一面に跡つき、昔美なる容はなくて面体黒菊石引つりひとへに炭火で手水をつかひしごとく」と悲惨な最期を迎えるのである。ここに『娘氣質』の女性像は悪人であるというよりは、女徳、女巧を備えていないので笑いの対象、または悲惨な最期を迎える設定となつたと考えられる。

以上、『娘氣質』の「氣質」を備えた女性像を通観して、一、身分、性格、能力等何れかの理由で男性より強気な立場でいられる女性達が描かれたこと、二、本意如何にかかわらず浮気を重ねる女性達が描かれたこと、三、天性とされる「氣質」を備えた女性達が描かれていたことが確認できた。その全ての「氣質」は悪の表象であるというよりは、女性達それぞれの「自我」として浮き彫りになっていると言えるだろう。

### 二の三、女訓書からはみ出た『世間猿』と『妾形氣』の女性像

秋成の浮世草子に登場する女性達の多くもまた、ここまで見えてきた女性達と同様、女訓書に明記されている婦徳、婦巧からは程遠い。秋成作浮世草子についての先行研究では、女性像の典拠や実在のモデルが明らかにされ、人物造型の過程は明確になっている。ここでは角度を変えて、秋成作浮世草子の女性像の特殊性を考察することにする。まず、『世間猿』の一の二の女性おゆふは、亡き夫古太夫と同様、信心深い女性であったが、隣の「邪神」と描かれる十兵衛と暮らすようになる。その経緯は次のようである。

鬼と思へど問るれば、かからふ嶋のなき身をば、涙ごかしに濡られて、子ゆへの闇にふみかぶり、ついそれなりのころび寝は、これも神の縁結びと、隔の壁も打ぬいて表むきの女房、娘とも親子の盃。

夫を亡くしたおゆふは、右のように仕方なく十兵衛と一緒にになるのであるが、以後「銀になる娘じやと可愛外に慾心魔王、(中略)神道のちんぷんかんを覚へぬいてゐたけれど、一生乞食同前で死れたではないか。常常こなたの役にもたたぬ神たたきが気にいらぬ」と描かれるほどに変わってしまう。一方、金欲に関しては、「教女子法」では直接禁

じることばは見いだせないが、第十項目で「もし夫不徳にして、家貧賤なりとも、夫の幸なきは婦の幸なきなれば、天命のさだまれるにこそと思ひて、うれふべからず。」とあり、貧しさにも耐え抜くことが求められている。こうして見ると、おゆふは女訓書の教えにしたがっているとは言えない。しかし、夫を亡くし、経済的困窮に陥った女性として、おゆふの姿は決して非日常的だとは言えないのではなからうか。

さて、おゆふのような女性の「金」に対する現実的認識は、「妾」という身分のためであろうか、『妾形気』でより鮮明に描かれている。殊に『妾形気』の二の妾花園、二の妾おすみ、二の三のお糸、三の一の繁野は、金のため男をだます女性として描かれるので、これを順に追ってみよう。

▼それはといへば何事も本銭のしがなくなつては手すきみありとて又つまらず。其工面さへ出来たなら、鬼住里へもゆく心。(中略)さすが女のうはがしこく、金と思ふてちから草、(二の一)

▼一、おすみ事、とし月不便をうけ遣はし候所、我ら目を掠、八左衛門と竊にこんたん致て、(二の二)  
▼お糸も尖り声にて、ほんにおかしい衆じや、ぬしの

ある身を取らへて、なめ過たものいひ、(二の三)  
▼繁野いづ方にて聞しぞ、次郎太夫がよい物たんと持て居る事をよく知り、初会にはしんじつにうれしがるもてなし。(三の一)

右のように、一の一で半平が夜逃げを提案すると花園は金の有無を問いただし、おすみはお金のためには主人三郎七に尽くすようなふりをするが、八左衛門と良い仲であることが明らかになる。また、お糸は六人の僧を金のために騙し、繁野も男に敵討ちを頼むふりをしてお金を騙し取る。このように、おゆふを含めて、花園、おすみ、お糸、繁野は経済的困窮から「金」に執着せざるを得ない立場にいる。もちろん、彼女達の姿から、女訓書で説かれる「勤勉・儉約」という甲斐甲斐しさは見受けられないが、「金に執着するしかない」経済的弱者の生々しさは見て取れるのではなからうか。次に、もう一つの特異な女性像である、『世間猿』三の一の尼を見てみる。

幼少より武芸を好まして、さる浪人衆にけいこいたし柳生流一道の印可は残らず伝へてをります。

この尼はそれこそ「幼少より武芸を好む」という「氣質」を備えているだけで、悪人とは言い難い。ただし、尼の武家氣質は当時の女訓書に述べられているような女巧、つま

り針仕事等の家庭内の仕事とは大いに性格を異にする。このため、彼女の「氣質」は、当時常識的には受け入れられないものであり、「扱はやつぱり人で有つたか、天狗でもないそうな。」と描かれるほどの笑いの対象となつたのである。しかし、この尼の氣質は一般にはまだ受け入れられてはいないものの、己の願望によるものとして描かれている点に注目したい。

一方、『妾形氣』の一の二・一の三には不老不死の女性お春が登場するが、嫉みのために死を迎える怪異的存在である。彼女が、嫉みの結果として死を迎えるということは、いかにも「教女子法」的発想に則した当然の結果である。しかし、「此婆の靈を祭り、お猫様と尊敬して」と鎮魂が行なわれたのは、己の情欲を成就出来なかつたお春に対し、せめてもの慰撫をする説話的設定ではなからうか。つまり、お春の「情欲」という願望は作中で笑われるものの、その最期の描かれ方から、全く否定されているとは考え難い。この点は『妾形氣』の四の一でも確認できる。四の一に登場する芸子は、愛する男の正室になるため、狐に化けて目的を達成する。この説話的設定も、やはり女性の情欲の正当化の一側面であると考えられる。ただし、『妾形氣』の三の二・三の三で、遊女藤野が才太郎のために再度

遊女となり、犠牲的に生きてゆく姿は、「毛唐人の書し烈女伝にも、此かく成るはあるまじ。」と賞賛の対象にされている。これは『妾形氣』において、賞賛の対象とすべき女性像は、やはり女訓書で勧められる「男に従順」な者であることを示しているであろう。

以上、秋成の浮世草子に出てくる女性像は、女訓書に照らし合わせると、もちろん非常に歪んだものであり、笑いの対象として描かれざるを得なかつたと言える。しかし、その笑いの中に、金、情欲、氣質等に執着せざるを得ない、男と同様の一個人としての生々しさが描かれていたと考えられる。また、『妾形氣』の一の二・一の三のお春、四の一の芸子の話は、説話的とも怪談的とも言える結末を迎えるが、これは彼女達の「情欲」が、現実の世界では挫折しながらも非現実的世界で成就される可能性を示唆し、女性の「情欲」そのものを認めている一つのポーズであると考えられる。つまり、秋成の浮世草子の女性像を通して、金、情欲、氣質等の「願望」の形象、所謂「自我」の現実的形象に忠実であろうとする女性達の存在が垣間見られると考えられる。したがって、女訓書の勧める理想的女性像からはほど遠い現実的「自我」を備えた女性が存在すること、その事実を秋成作浮世草子の女性像を通して読み取れるのではな

かるるか。ここに、秋成作浮世草子に登場する女性達の意義が存在すると考えられる。

### 三、女訓書からはみ出た『青邱野談』の女性像

さて、『青邱野談』の内容は、不利な生活条件を個人の知恵や意志で克服するという積極的現実主義世界観を基盤にしているものが多いと言われている。<sup>14)</sup>ここに『青邱野談』を通して朝鮮王朝の特殊な女性像を垣間見られると思うので、これを確認してみたい。<sup>15)</sup>

『青邱野談』には全二百四十の短編が収められ、四十話に女性主人公が登場している。その内の二十二話の女性は、単に男性に従順であるとは言い難い。その中でも一番多い類型は、知略で男性、及び男性の家を助ける女性達であるので、その具体的な姿をいくつか見てみる。<sup>16)</sup>

▼ここに私のために万金を出すという人がいます。父上がこれをお受け取りになれば一生豊かな暮らしができるというのに、どうして私が嬉しく思わないことでしょうか。私たちは元々賤しい身分で、どうして貞節を守る必要があるのでしょうか。いわんや、亡き夫とは結婚の約束をしただけであり、盃を交わしたこともないのに、(七の九倡義兵賢母勳子)

▼その妻が夫に、「碁は実に簡単なことですので碁盤を持ってきてください。」と言い、その妙手を教え、(十四の八倡義使頼良妻成名)

▼その妻は、「死ぬことは恐れるべきではありません。もし、あなたが死ぬとしても名を得ることでしょう。死ななければ幸いと言えましょう。どうぞ、恐れずその職に申し出てください。」と言うと、夫は尤もだと思いい、(中略)その妻は、「その住人が皆死んだのは当人達の宿命でありましょう。どうして幽霊が人間を害することができましょうか。私は女の身ではありませんが、私があなたとお供いたしましたしょう。」と言う。(十八の三雪幽冤婦人識朱旗)

右のように男性、及び男性の家を助ける女性達は、皆知略でもって現実を直視し、時には貞節を否定し、夫に碁の妙手を教えては金儲けをさせ、かえって男性を保護するというように、女訓書の従順の教えを超えて現実の損得に明るい女性として描かれる。ここに男性、及び男性の家のためではあるが、当時の常識をやぶった凛凛しい女性像が描かれたと言える。一方で、『青邱野談』には男を自ら選ぶ女性も登場する。一例として二の二の話を見てみたい。

しかし、人となりは純直愚拙であり、周りの人々はこ

れを笑うものが多かった。少女はこの男を見て「万が一この人でなければ、私は終に結婚せず年老いていくでしょう。」と言った。その母は少女の意に逆らえず、終に結婚させると、少女は夫に農業を辞めさせ、学問に励むよう勧める。しかし、彼の才は至らず、真面目に勉強したものの教養を得られなかった。

右の傍線部のように、女性はいづれの判断で夫を選び、後には彼を通して富と権力を得る。一見、この女性の前で確認した類型の女性達と大差ないようにも見受けられるが、彼女は夫の家ではなく、己の家の繁盛のために知略を用いるのである。彼女は亡き父の亡骸を密かに他人の良い墓場に移す大胆な人物であり、無能な夫を助け、家を繁盛させる。二の一同様、三の十六、五の一、十の一の女性達も皆自ら夫を選び、この女性達は、順に、「私のような者もよい時期に出会い身分の高い者になっても良いのではないでしょうか。」「私はこの家の女中です。あなたは私の夫になつたので必ず主人に挨拶すべきであるが、這いつくばつてお辞儀しないでください。」「あなたは主人と奥様に挨拶するとき私の話した通りにしなさい。」と述べ、自らの上昇志向を實現化して行くのである。このように『青邱野談』には、男を出世させることにより己の願望を満たす女性像が描か

れるのであるが、その姿は女訓書の教えとは程遠く、むしろ男性と同様に、自身の願望を露わにしていると言える。次に、妓女の身分で男を変えたい女性を見てみる。まず、十一の二の妓女閔愛は、鄭注書という男性に愛されていたが、富豪の李座首という男性から一千両で夜を共にするよう誘われる。閔愛は祖母の祭事を口実にして李座首と密会するのであるが、これに気づいた鄭注書は兵卒を送り二人を捕らえに来る。この場面を確認してみよう。

李座首が恐れ部屋の中で震えていると、閔愛は、「少しも恐れることなく衣冠を整え私の後ろから出てください。」(中略) 閔愛が微笑み述べるには、「ここに誰もいないことは皆知っている。李座首は虫けらでもないのに、どうして隠すことができようか。どうぞ、お探しなさい。」

このしたたかな閔愛は最後まで鄭注書をたぶらかし、李座首と共に大邸宅で歓楽をきわめるのである。十四の十の妓女梅花も老人の愛を退け、若い男性と密会を重ねるのであるが、後にこの若い男性が朝廷から懲罰を受け死に至ると、自決して義理を守り抜くのである。閔愛も梅花も、最初の主人をたぶらかしたという意味では決して義理堅い女性像とは言えない。しかし、真に愛する男性のために強か

に主人をたぶらかし、己の願望に忠実であろうとする姿は、やはり特殊であると言えよう。

最後になるが、十八の四には経済的成功のために夫と夜を共にしない、蓄財だけに生きる女性が登場する。

妻が言うには「我等夫婦が万が一同寝すると自然と子供のできることでしよう。これもいいことですが、口が増え病に悩み財を失うことは明らかで、これをどういたしましょう。あなたは部屋の上の半分の方で草鞋を作り、私は下の半分の方で針仕事をし、十年を限りに一日におかゆ一杯で家業を成し遂げましょう。

右のように、女性は夫に具体的な形で蓄財を勧め、夫はこれに従うのであるが、ここには妻に心情的にリードされる夫と、何よりも経済活動に積極的である妻の姿が描かれている。蓄財に執着するこの女性の姿は、もちろん一義的には夫、家のためではあるが、全く夫に頼ることなく経済的困難に立ち向かおうとする姿は、従順からはかけへだたっていると言えよう。

以上、『青邱野談』では、一、男性、及び男性の家を助ける女性達、二、自らの判断で夫を選び、己の願望を満たす女性達、三、妓女でありながら主人をたぶらかし愛する男と一緒にいる女性達、四、男性に頼ることなく積極的に経

済活動に挑む女性が描かれていることを確認できた。彼女達は皆悪人であるとは言えない。ただし、女訓書の従順の教えとは程遠く、それぞれが当面している現実の必要性に応じて果敢に行動し、その結果は所期の願いを遂げるという共通点があると言える。これらの女性達の行いが、全て「自我」の成就に直接結びついたとは言いが、『土小節』の暗示する積極的女性像に近いものがあつたと考えられる。

### おわりに

以上、浮世草子と朝鮮王朝野談には、当時の儒教の理想的女性像とされるのも一部見受けられたものの、女訓書の教えからは大きく離れ、自由な愛、経済力、上昇志向など、己の願望、つまり「自我」に従おうとした女性達が多く確認できた。これら両国の虚構の中の女性達は、反社会的であるとは言えないまでも、男性中心の社会的期待に応えることなく、一個人として生きようとしたところが類似していると言える。殊に『五人女』、『娘気質』における自由な愛への願望、『娘気質』の男性と女性の立場の逆転、及び渴望といってよいほどの願望、秋成浮世草子に見える金銭への執着、これらの全てが形を変えて『青邱野談』の女性像からも見受けられた。ただし『青邱野談』で考察の対象に

なった女性達は、社会的弱者であるにもかかわらず、始め

から特殊な知略を備え、現実を相手にしているのです、その「自我」は当然発現されるものとして描かれていた。このため、女性が「自我」を有するようになる過程は作中で描写されなかった。反面、浮世草子では女訓書に照らし合わすと否定的に評価されたり、笑い飛ばされたり、歪んだものと見なされる女性の「自我」が、個々の「願望」として描かれていた。このため浮世草子は、女性を個人のレベルで考察する機会を得たと言える。したがって、日本の女訓書が女性を男性の対極に置いて認識したのに対し、浮世草子は女性の「自我」を、男性のそれと同様に個人の側面として描いていったと考えられる。

本稿は、朝鮮王朝における野談の中で『青邱野談』のみを扱うに止まったため、より多様な朝鮮王朝の野談研究を今後の課題として残したい。

朝鮮王朝とする。

(2) 野談は、朝鮮王朝の庶民の暮らしや認識、または庶民に関する両班(文官・武官)の話が展開する雑話集で、量質共にすぐれた野談には、いわゆる三大野談集『溪西野談』、『東野彙輯』、『青邱野談』がある。それぞれの著者や成立の経緯はほとんど明らかではなく、その内容も、説話から小説への途中のものが多いと言われている。日本の仮名草子、御伽草子と同様に、小説と言うにはその構造の面で未完成の部分が多い。その内容は当時の逸話、見聞、巷談等を潤色、再構成したものが多。

(3) 『青邱野談』は他の野談集を集大成したものとされ、漢文本と共にハンケル本が存在するという側面からも注目に値する。

(4) 以後、その内容は石川松太郎編『女大学集』(東洋文庫三〇二)(平凡社、一九九〇)の中の『和俗童子訓』巻之五「教女子法」による。

【注】  
(1) 現在の韓国では李の姓を持っていた王が支配していた

一三九二〜一九一〇年までを朝鮮朝、または朝鮮王朝と呼び、李氏朝鮮と称するのは差別的であるとされるので、本稿では

(5) 第一項目「女兒は親の教えひとつで育つ」、第二項目「幼いときから『女徳』を育てるのが大切」、第十八項目「女性の身につけるべき手習い・読書・教養」とある。

(6) この引用文の前には「およそ婦人の心ざまのあしき病は、和順ならざると、いかりうらむると、人をそしると、物ねたむと、

不智なるとにあり。凡そ此の五つ病は、婦人に十人に七八は必ずあり。是れ婦人の男子に及ばざる所也。みずからかえり見、いましめて、あらため去るべし。此の五つの病の内にて、ことさら不知をおもしとす。不知なる故に、五つの病おこる。婦女は陰性なり。陰は夜に属してくらし。」とある。

(7) 彼は上田秋成とほぼ同時代の人で、朝鮮王朝の実学者朴趾源の弟子である。

(8) 『士小節』は、朝鮮王朝後期の家庭倫理を一番具体的に記録したものの一つと言える。その内容は士、婦女、童児のための礼儀と、修身の規範を具体的に示すものである。ただし、女性の徳行と言行に関する記述に比べ、女性の貞節に関する言及は『戒女書』と同様に皆無である。婦女のための内容は、性行、言語、服飾、動止、教育、祭事、人倫、事物の項目を設けて記述している。

(9) 例えば、新編日本古典文学全集の解説で、東明雅は「作者の西鶴は、彼女たちの行動に対して、一応、教訓的なことを述べ、封建の掟と道徳とを強調している。しかしながら、彼女たちの悲惨な運命を描いてゆくその筆には、おのずから同情的なものがある。彼女たちの最期を美化し詠嘆している。」と述べている。

(10) 清十郎と恋仲であった皆川、お夏二人に対する評価の差をめぐって、身分上の差異であるとする竹野静雄の論『好色五人女』の性愛表現―その特異性についての試論（『古田文学』五十一号（『古田文学会』二〇〇二、十一））があるが、身分上の差異は西鶴が敢えて述べなくとも当時の読者は十分理解していたと考えられる。このため、本稿では人物に対する評価は人物個々の行いによると理解することにする。

(11) 『五人女』の女性像について、一巻の遊女皆川は話の重要度から考察の対象にしないのが一般的であるが、本稿では男性主人公との恋愛関係にあった女性像の造型という側面を考察したいと思い、皆川も考察の対象とする。

(12) 長谷川強『浮世草子の研究』（桜楓社、一九六九）、佐伯孝弘『江島其磧と氣質物』（若草書房、二〇〇四）等に詳しい。

(13) 中村幸彦「秋成に描かれた人々（一）」（『国語国文』三十二巻一号（中央図書出版社一九六三、一））

(14) 崔ウン「注解青邱野談（一）」（『国学資料院』一九九六）の巻頭に、『青邱野談』では封建主義的世界観をいよいよ脱皮しつつある十八〜十九世紀の朝鮮社会の転換的諸様相を確認できる。このような現実的世界観と資本主義的思考方式の出現は同時代の実学者達の漢文小説とも精神的に通ずるものがあり、『青邱野談』の価値を更に高めるものである。」と詳しい。以下、『青邱野談』からの引用は、本書を元に論者が和訳したものであ



る。

- (15) 野談集所載女性像に関しては李ウオルヨンの「野談集所載女性談研究」『韓国言語文学』第三十九集（韓国語文学学会、一九九七、十二）に詳しい。

- (16) これに当たるのは、三の十五、四の四、七の一、七の九、十一の九、十三の十一、十四の八、十八の三である。

(付記) This work was supported by the Korea Research Foundation

Grant funded by the Korean Government(MOEHRD)\*

(KRF-2007-362-A00019)